

自然を乗り越えるとはいかなる事態か —被投的企投の統一について—

加藤 皓士

はじめに

1927年刊行『存在と時間』において、基礎存在論とは「世界」と世界の内部で出会いうる存在者の存在についての理解を持つ現存在を分析することのうちに見出されるものであり、他の全ての存在論がそこから生じる存在論の基礎であることが宣言される。これを前提として、存在一般を時間 (Zeit) から理解するという壮大な試みが目論まれた。

『存在と時間』刊行後、ハイデガーはアリストテレスに代表される形而上学に積極的にコミットし、自らの思索を現存在の形而上学と標榜するようになる。それに伴い、ギリシアのピュシス (φύσις) が考察の対象となった。我々が検討したい自然 (Natur) は、ピュシスのドイツ語訳のことであり、「全体における存在するものが自分自身を形成しつつ支配すること」(GA29/30.S.38-39) という意味で考えられている。我々はこの自然と人間 (現存在) の関係性について考察したい。なぜならこの意味の自然は、『存在と時間』の基礎存在論のつまずきの石となりうるものに思えるからだ。

のちに詳述するが、この意味の自然が持つ存在性格について簡単に確認しよう。1) 現存在の事実的な実存に依存することなく、むしろ現存在の前提であるような存在者。2) 現存在も含めすべての存在者を包み込むような、圧倒的ですべてを支配する存在者。

この自然は、現存在の存在了解にすべての存在者が含まれていることが前提とされる『存在と時間』の基礎存在論からすると、折り合いが悪いように思われる。その理由として以下の2点が挙げられる。1) 道具的存在者やその欠か態としての客体存在 (Vorhandensein) とは異なり、自然は現存在の存在了解に含まれないように見えるから。2) 現存在の事実的な実存に依存しない存在者を、現存在に相関的なものとして考えることができないから。

しかし現存在の形而上学構想という表現からも分かるように、ハイデガーはあくま

で現存在を中心にして自らの思索を進めようとしており、先ほどの自然の存在も現存在との関係性から理解しようとしているように思われる。我々は自然と人間（現存在）の関係性について、ハイデガーがどのように考えているのかを検討したい。ハイデガーは自然との関係を語る際に、「乗り越え（Überstieg）」という表現を用いる。「存在者のただ中で存在しつつ、この存在者によって包み込まれているにもかかわらず、実存するものとして現存在は、常にすでに自然を乗り越えてしまっている」（GA9.S.139）。乗り越えは、この時期のハイデガーの最重要概念である「現存在の超越（Transzendenz des Daseins）」と重ねて理解されているため、我々は現存在の超越を理解することを最大の課題としたい。

1 節 自然の存在性格とその問題点について

ハイデガーの考える自然は、ギリシアのピュシスを翻訳したものであり、おのずから成長するものという意味を持つ。「このピュシカという語の中には、ピュシスという語が挟まっているが、我々はこれを通常、自然と訳している。この語はラテン語の、*natura-nasci* に、生まれてきたもの、生ずる、成長するに由来するものである（GA29/30.S.38）。ハイデガーは加えて、ピュシスの本質は「全体における存在するものが自分自身を形成しつつ支配すること」であるとする。この意味のピュシスは、『存在と時間』後にハイデガーが形而上学に積極的にコミットするにつれて、重要な位置づけを持つようになる。我々は『存在と時間』後の自然の持つ位置づけについて検討したい⁽¹⁾。

全体における存在者がはっきりと問題とされるのは、1928年夏学期講義『論理学の形而上学的始原諸根拠 ライプニッツから』（以下『ライプニッツ』と表記）で宣言される現存在の形而上学構想からである⁽²⁾。『ライプニッツ』以降で展開される現存在の形而上学は、アリストテレス形而上学を範例としている⁽³⁾。ハイデガーは1929/30年冬学期講義『形而上学の根本諸概念』で、アリストテレス形而上学の対象が、本性（Wesen）としてのピュシスと神的な存在者としてのピュシスである点を指摘したうえで、それらが存在一般の学である存在論と神学に対応すると考えている。アリストテレスの形而上学はピュシスの二義性を反映したものである。ハイデガーが自然を主題化する大きな動機の一つに、形而上学への接近があげられよう。

ハイデガーはピュシスの二義性と形而上学の二重性を以下のように考えている。本性という意味のピュシスは、「存在者を存在者たらしめるもの (was das Seiende zum Seienden macht)」を意味している。存在一般の学は、存在者の存在であるウーシア (οὐσία)の探求のことである。それに対して、ハイデガーの考える神的な存在者とは「端的な存在者—天空。包括するもの、そして制圧するもの、我々がそのもとへ、そのの上へと投げ出されているもの、我々がそれによって取り去らわれ、襲われてしまっているもの。圧倒するもの (Übermächtige)」(GA26.S.13)である。そのため神学は圧倒的で、その支配下に我々が置かれてしまっているような存在者の探究を意味すると彼は解釈している。ハイデガー自身が自然という概念を使う際には、自ら成長する存在者であるのみならず、我々を圧倒し包み込んでしまっている存在者を念頭に置いている。

我々は自然が圧倒する存在者であることを押さえる必要がある。ハイデガーの考える「全体性 (Ganzheit)」とは、個々の部分に先立ち与えられ、すべてを支配するような性格を持つ。全体における存在者は現存在も含め、すべての存在者を支配するような圧倒的な存在者である。またハイデガーは自然との関わりを被投性 (Geworfenheit)から捉えようとしているのだが、それは自然が我々を圧倒し包み込むような存在者だからである。「我々がまったく広い意味で自然と呼ぶところのものによって、例えば我々は我々自身を担わせることができる。ただその本性に従って、何かへと投げ出され、ひきつけられているものだけが、その何かによって担われ包み込まれることができるのである(GA26.S.174)」。ピュシスが圧倒する存在者であるといわれるのは、我々が常にすでにそこへと投げ出され、その全体性の内に包み込まれてしまっているような存在者だからである。

以上の考察からも、自然が現存在と相関的な存在者としてではなく、現存在が常にすでに投げ込まれてしまっているような存在者として考えられていることがわかる。自然が『存在と時間』の基礎存在論のつまずきの石になりうる理由は、自然が現存在の事実的な実存に依存することなく、むしろその前提とさえ言われる存在者だからである⁽⁴⁾。この問題は端的に以下の引用に表現される。「言い換えれば、了解のうちに存在が与えられる可能性は、現存在の事実的な実存を前提に持つ。現存在の事実的な実存はふたたび、自然の事実的な客体存在を前提に持つ」(GA26 S.199)。

ここでは存在了解の前提である現存在の事実的な実存の前提として、自然の事実的

な客体存在があると考えられている。自然が現存在の事実的な実存の前提であるといわれる理由は、現存在も存在者として存在する限りにおいて、全体における存在者の中へと投げ出されているからである。しかし自然が存在すると語る視点を、ハイデガーはどこから持ってくるのだろうか。この意味の自然は、存在了解とどのように関係するのだろうか。

あらためて自然を語ることの困難さについて確認しよう。ハイデガーの考える自然は、現存在の事実的な実存に依存することがなく、むしろその前提として考えられるような存在者であった。そのため世界の内部で出会われるような存在者ではなく、現存在の世界内存在を分析することを通じて、その存在を解明することが困難な存在者である。『存在と時間』でハイデガーは現存在の開示性こそが、内世界的な存在者の発見の根拠であると考えている。しかし自然は、現存在の存在に先立つものとして考えられているため、現存在の開示性に基づいているとは考えられない⁽⁵⁾。もしこの考えが正しいのであれば、この意味の自然は、現存在の存在了解を通じては到達不可能に思える。存在了解を持つ存在者を分析することを通じて存在一般を理解するための地平の挙示を目指した、『存在と時間』の基礎存在論も挫折せざるを得ないように思われる。

しかしこのような理解は果たして正しいのだろうか。もしこの考えが正しいのであれば、そもそもハイデガーは自然が存在するとさえ言うことができないであろう。彼はどのような戦略を立てたのか。現存在の存在もしくは自然の存在のどちらかを出発点とするのではなく、むしろ現存在が自然を乗り越えることを通じて、自己自身へと至るという生起 (geschehen) の現場を押さえようとする。こうすることによって、現存在に先立つ自然の存在性格を確保しつつも、自然を絶対的に不可知なものとしなことが可能となる。この乗り越えをハイデガーは、現存在の超越と呼ぶ。そのため次節では、現存在の超越について考察したい。

2 節 自然を乗り越えるとはいかなる事態か

実存する現存在は「常にすでに (immer schon)」自然を乗り越えてしまっていることを、ハイデガーは認めている。なぜこのように言えるのかといえば、この乗り越えが現存在の自己性を構成しているからだ。「乗り越えの中で、第一に現存在は、現存

在であるそのような存在者へと、現存在それ自身としての現存在へと至るのである。この超越は自己性を構成する」(GA9.S.138)。しかし乗り越えが、乗り越えるものの外部に立つことを意味するのであれば、全体性の外部に行くことは不可能であるため、自然の乗り越えは不可能である。自然の乗り越えはどのような事態なのだろうか。

ハイデガーは超越が乗り越える先を世界であると考えているため、我々は世界について検討してみよう。ハイデガーは世界を、そこから各自の現存在が存在者へとふるまう指意を受け取るような全体性として捉える。「全体性としての世界は存在者ではないものである。むしろ現存在がふるまう存在者が何でありうるのか、またどのように振る舞うことができるのかに関して、そこから現存在が自らに指意 (bedeuten) を与えるようなものである」(GA9.S.157)。指意する (bedeuten) という『存在と時間』の有意義性を踏まえた表現でハイデガーが考えているのは、それを見越して存在者が存在者として露わとなる可能性を意味しており、そこから現実が理解されるような可能性のことである。

ハイデガーは世界を「現存在の「のために」のその都度の全体性 (die jeweilige Ganzheit des Umwillen eines Daseins)」であるとも考えているため、「のために」という性格に注目することで、世界への乗り越えが意味するところを考えたい。「のために (umwillen)」は『存在と時間』では「主旨 (worumwillen)」に代表される形で出てくるが、そこから道具的的事物や他者が理解されるような現存在の存在可能性のことであった。『根拠の本質について』においてハイデガーは、この世界を存在者を超えて超投する (Überwurf) ことを通じて、存在者が存在者として露わとなると考えている。

「しかし世界の企投は、企投がことさら企投されたものを把握していないのと同様に、企投された世界を存在者を超えて超投することである。この前もって超投することが初めて、存在者が自らをそれ自身として開くことを可能とするのである」(GA9.S.158)。

『存在と時間』では、主旨である可能性へと向けて、投げかけることが企投として理解されていたが、ここではむしろ存在者を存在者として露わにするために、存在者を超えて「のために」を前もって投げかけることが、企投として理解されている。「のために」へと存在者を超えて跳躍することを通じて、存在者を意味付け (指意) する

視点を得ることが企投として考えられるようになる。

我々はここから自然の乗り越えと、世界への乗り越えがどのように結びつくのかを理解できる。全体における存在者を乗り越えるとは、全体における存在者をそれ自体としてあらわとすることであり、そこへと立ち返ることを意味する。

「確かに現存在の世界企投の内には、常に以下のことがある。現存在がこの乗り越えの中で、乗り越えを通じて、存在者それ自身へと帰来するというのである。この前もって投げだすことのうちで企投された「のために」は、この世界地平のうちで露わとなった存在者の全体へと帰来するよう指示するのである」(GA9.S.165)。

世界企投を通じて、全体における存在者は「この世界地平の内では露わとされた存在者の全体」へと変化している。これは世界企投を通じて、全体における存在者を「現存在が自らに指意を与える」場としての世界へとすることを意味する。ピュシスは我々を包み込み、すべてを圧倒する存在者のみならず、存在者の存在という意味も持っていた。そのためこの帰来は存在に自己を拘束させることをも意味する。ハイデガーはこの意味の乗り越えの本質のうちに、自然の支配をあらためて引き受けなおすという事態を読み取っており、それを「自由 (Freiheit)」と表現する。「自由のみが、ある一つの世界が支配し世界することを現存在にせしめることができるのである。世界は存在するのではなく、世界するのである」(GA9.S.164)。自然を乗り越えるとは、別のどこかへといたることを意味するのではなく、むしろすでに包み込まれてしまっていた自然を、あらためて世界として支配せしめる自体を意味する⁽⁶⁾。「超越は世界企投を意味するのだが、企投するものが、乗り越えたものによって、すでに気分づけられ、徹底的に支配されているという仕方での世界企投なのである」(GA9.S.166)。

我々は『根拠の本質について』で検討されている、自由に属する根拠づけ (gründen) について考察したい。自由と現存在の超越は『根拠の本質について』で重ねて理解されているため、この意味の自由に属する根拠づけを検討することを通じて、現存在と自然の関係性についての理解を深めたい。ハイデガーは時間の三契機 (将来・現在・現在) を念頭に置きつつ、根拠づけには三つの契機が属すると考えている。将来性に「創設 (stiften)」を、現在性に「地盤を受け取ること (Boden nehmen)」を、現在性

に「証示 (ausweisen)」・「根拠づけ (Begründen)」を対応させている。我々はすでに自由が、世界の支配を現存在にさせしめることだということを確認している。彼は全体における存在者に開かれたあり方をしてる現存在の「自由」こそが、根拠一般の根拠 (根源) であると考えてるのである。

創設をハイデガーは第一の根拠づけであると指摘したうえで、それを世界企投と重ねて理解する。そのため創設とは「のために」という可能性へと跳躍することである。この乗り越えを通じて「世界地平の内で露わとされた存在者の全体」へと立ち返ることを、ハイデガーは「地盤を得ること」という。世界企投することを通じて、全体における存在者それ自身へと帰来することは、現存在を全体における存在者それ自身 (存在) に根拠づけ拘束させることである。創設と根拠を受け取ることを通じて、現存在は個々の存在者と関わることができるようになる。現在性に対応する証示とは、存在論的な真理に根拠づけられることを通じて、現存在が個々の存在者と関わることが可能となる事態を意味する。

ハイデガーは根拠づけをなぜの問いの可能性の条件であるともいう。「これによれば、根拠づけとはなぜの問い一般を可能とすることと同様のことを意味する」(GA9.S.168)。またなぜの問い一般の超越論的な必然性を、創設と地盤を受け取ることのうちに見ている。「しかし最初に挙げた二つの根拠づけのあり方が超越に共属するため、なぜの問いが生まれるのは超越論的に必然的である」(GA9.S.169)。

ハイデガーは根拠の根源のうちに、根拠へと開かれたありかたを見て取っている。なぜなら根拠が可能であるためにもまず、根拠を問うことの可能性が前提となるからだ。根拠を問うことができなければ、そもそも根拠づけすることさえできない。根拠を問うことができるための超越論的な条件こそが、答えられなければならない。ハイデガーはその条件を創設と地盤を受けとることのうちに見ているため、それを踏まえつつなぜの問いの超越論的な条件について考察したい。

我々がなぜと問うことができるためには、現実を乗り越え可能性へと跳躍をする (Überschwingen) 必要がある。ハイデガーはそれを「のために」を企投することとして理解している。現実がそこから捉え直される「のために」へと跳躍することを通じて、我々は初めて現実の根拠を問う可能性へと開かれる。例えば、『存在と時間』の死の可能性は、生が不可能になる可能性を意味するのみならず、我々各自の生を日常への埋没から目覚めさせるものである。我々は死の可能性を先取りすることを通じ

て、日常の埋没の中から、自己が日常に埋没してしまっているという事実に気づき、あらためて自らの存在の根拠を問い直すことができるようになるのである。

なぜの問いの条件には、可能性への跳躍のみならず、現実と根差している必要がある。すべての可能性を同じものとして見通せる存在には、なぜ「こうであって、ああではないのか」という問いが生じる余地がないからである。そのためなぜを問う我々は、現実へと投げ出されている必要がある。さらに「のために」と被投性を結び付けているのは、事実的に実存する現存在に基づく。現存在が自己の存在を絶えず気遣うことが、「のために」へと跳躍することを通じて、被投性へと立ち返る運動を基づけているのである。死の可能性をおのれが引き受けるべき可能性として引き受けることと、実存するという被投性へと立ち返ることは、あくまでこの間を振動 (schwingen) することができる現存在によって可能なのである。ハイデガーはこの事態を遠さと近さという言葉でもって、以下のように語る。

「そして人間は、諸可能性の内では跳躍するような実存する超越として、遠さを本質とする。人間が彼自らの超越の中で、すべての存在者に対して形成するこの根源的な遠さを通してのみ、人間の中で物への真なる近さが立ち上ることとなる」 (GA9.S.175)。

ここで言われる遠さとは、現実へと帰来するために必要とされる可能性のことであり、現実を全体として見渡すための距離のことを意味する。我々は可能性へと乗り越えることを通じて、可能性と現実性を振動するような存在者なのである。

我々は以上の考察から、ハイデガーの考える根拠の本質を理解できる。根拠の本質は、現存在が「のために」へと跳躍することを通じて、常にすでに自己を支配してしまっていた全体における存在者を、あらためて根拠として生起させることである。しかしこの意味の自由は究極の根拠として理解されるべきものではない。むしろハイデガーはこの自由を深淵 (Abgrund) とさえ呼ぶ。

「しかしこの根拠として、自由は現存在の深淵である。個々の自由な振る舞いに根拠がないのではなく、自由は超越としてのその本性の中で、彼の有限な選択の前で、すなわち彼の運命のうちで裂け開ける諸可能性のうちへと、存在可

能性としての現存在を立てるのである」(GA9.S.174)。

「しかし現存在は、存在者を世界企投しつつ乗り越えることの中で、自己自身を乗り越えなければならない。その結果はじめて、この上昇から自身を深淵として理解することができるようになる」(GA9.S.174)。

なぜ自由が深淵であると呼ばれるのか。その理由は、現存在が自らを根拠づける自然を乗り越えてしまっていることの見出せる。確かに現存在は世界企投を通じて、全体における存在者を根拠として生起させている。この意味の世界企投は、現存在の意のままにはならない。「すべての世界企投は、それゆえ被投的である」(GA9.S.175)。しかし現存在は徹底的に可能性として存在しているため、自然を根拠としてあらためて生起させることは、あくまで現存在の「有限な選択」にゆだねられている⁽⁷⁾。そのため自然を根拠としてあらためて生起させることなく、日常に埋没する可能性にも現存在は開かれており、この意味の自由は本質的に深淵である。自然を乗り越えることをめぐるハイデガーの思惟は、深淵としての自由にひとまず帰着することとなる。

結論

我々はハイデガーが自然と人間の関係性をどのように理解しているのかを解明するため、現存在の超越について検討してきた。確認できたのは、あくまで現存在が自然を乗り越えるという生起の現場を通じて、人間存在に先立つ自然についてハイデガーは考察しようとしていることである。現存在の事実的実存に依存しない自然は、現存在の世界企投を通じて、「この世界地平の内で露わとされた存在者の全体」となり、現存在はそこへと立ち還ることとなる。自然の乗り越えは、現存在の被投的企投を通じてはじめて理解可能である。そして自然を乗り越えることは、究極的には深淵としての自由に行き着くことが確認できた。今回は『存在と時間』と現存在の形而上学における、概念の比較検討にまで立ち入ることができなかった。しかし『存在と時間』と基本的には同じ概念装置を使用しつつ、あくまで現存在の被投的企投から自然を考えようとしていたこと、そしてそのさいどのように考察していたのかについては一つの理解を示せたと考える。

註

- (1) 『存在と時間』における自然の存在については、(総田、2012年)を参照。総田は『存在と時間』においても、「おのずから常にすでにある(von sich her immer schon ist)」という意味で理解すべき自然の存在があることを指摘している。この意味の自然の存在が、「存在者の存在の時的様態の解明という問題系の中で、とりわけ現存在の被投性を強調することに定位している」(総田、2012年、145頁)と考えており、『存在と時間』刊行後に主題化されると考えている。
- (2) 『存在と時間』刊行直後の、1927年夏学期講義『現象学の根本諸問題』において、内世界性が属していない自然についてすでに語られている(GA24.S.240)。しかし本研究では現存在の形而上学構想の範囲で自然の存在について考察したい。
- (3) アリストテレス形而上学の反復に関する詳細は、細川を参照(細川、1992年、282-284頁)。
- (4) 本研究はメタ存在論そのものについては扱わず、現存在と自然の関係性を『存在と時間』後にハイデガーがどのように扱っているのかを主題とするものである。メタ存在論が『存在と時間』では扱われることの少なかった、被投性分析の拡充の試みであり、存在了解の根拠を問うものであるという理解については、本研究もそれに賛同する(細川、1992年、282-347頁 丸山、2013年)。しかし『存在と時間』の段階で自然の存在が視野に入っていたかどうかに関しては、今回は態度を差し控える。あくまで『存在と時間』の現存在分析の成果に基づいて自然が理解されている点を示すにとどめる。
- (5) クローウェルは、存在論の存在者的な基礎としての全体における存在者の考察は、超越論的実在論へと陥ることで、現象学的な計画と矛盾することを指摘している(Crowell、2000年、325頁)。本研究は、一見すると現象学的には扱うことの出来ないように思われるこの自然の存在について、ハイデガーがどのように『存在と時間』の概念を維持しつつアプローチしたのかを解明することを目指している。
- (6) ここにはある独特な時間理解が働いている。全体における存在者は支配する存在者ではあるが、その支配が支配として生起するためには、自由が現存在に世界せしめる必要がある。
この時間のねじれは、『形而上学の根本諸概念』の「全体形成(Ergänzung)」の説明でも見られる。「この全体形成のもとで我々は、今まで欠けていたものを後から付け加えることを理解するのではなく、すでに支配していた「全体において」を前もって形成すること(das vorgängige Bilden des schon waltenden >im Ganzen<)を理解する」(GA29/30.S.505)。
- (7) ここには現存在の超越の二義性の問題がある。一つは現存在の可能性の条件としての、現存在の超越という意味。もう一つは、あらためて選び取られた可能性

としての現存在の超越という意味。1928/29年冬学期講義『哲学入門』では、後者の意味の超越が「明瞭に (ausdrücklich) 超越する」と表現されており、哲学とは明瞭な超越を根底から生起させることだとされる。「明瞭に超越することとしての哲学することは、現存在の超越をその根底から生起させることである」(GA27.S.396)。

文献 (ハイデガーを除き、著者姓のアルファベット順に並べる)

SuZ: Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 9. Auflage, Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 2006.

GA: Martin Heidegger, *Gesamtausgabe*, Vittorio Klostermann.

---Bd.9: *Wegmarken*, Friedrich-Wilhelm von Hermann (hrsg.), 2004.

---Bd.26: *Metaphysische Anfangsgründe der Logik im Ausgang von Leibniz*,
(Sommersemester 1928), Klaus Held (hrsg.), 1990.

--- Bd.27: *Einleitung in die Philosophie* (Wintersemester 1928/29), Otto Saame und Ina Saame-Speidel (hrsg.), 2001.

--- Bd.29/30: *Die Grundbegriffe der Metaphysik. Welt - Endlichkeit - Einsamkeit*,
(Wintersemester 1929/30), Friedrich-Wilhelm von Hermann (hrsg.), 1983.

訳出に際し、ハイデッガー全集(辻村公一ほか編、創文社)を参照した。

Crowell, Steven Galt: “Metaphysics, Metontology, and the End of Being and Time”,
Philosophy and Phenomenological Research, Vol. 60, No.2, pp.307-331, 2000.

細川亮一 『意味・真理・場所』 創文社、1992年。

景山洋平 『出来事と自己変容 ハイデガー哲学の構造と生成における自己性の問題』 創文社、2015年。

丸山文隆 「ハイデガーの思想における、基礎存在論からメタ存在論への転換の内的必然性について」 『論集』 32号、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室、2013年、104-117頁。

総田純次 「眼前性の概念の多義性と問題系の変遷 — 事実性の解釈学から基礎的存在論へ—」 『ハイデガー『存在と時間』を学ぶ人のために』 宮原勇編、世界思想社、2012年、130 - 155 頁。